



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

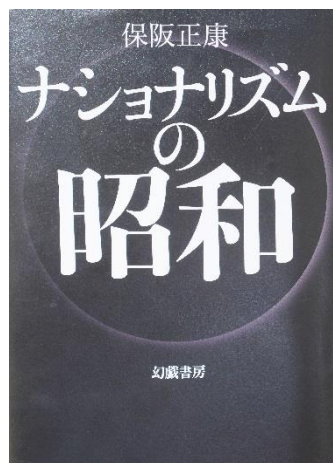
Ver.2-011 号

2018年8月の同志社人・保阪正康氏



・保阪正康氏（同志社大文学部社会学科 1963 年卒）

8月15日の NHK テレビに二度も顔を出した保阪氏について知人から「彼は同志社卒だろう？  
どんな作家？」と尋ねられた。整理された答えを持っていなかったのが、急ぎまとめてみた。



8月3日、『ナショナリズムの昭和』で和辻哲郎文化賞を受賞されたお祝いの会にて

< 目 次 >

1. 保阪氏自身の言葉で語る<経歴>
2. 特徴 2-1. 「昭和史」に特化  
2-2. 天皇への深い思い

2-3. 徹底した取材

2-4. 歴史を重視

2-5. 評論家

### 3. もうひとつの評価

#### 1. 保阪氏自身の言葉で語る経歴（昭和史に特化するまで）

ウィキペディアや書物の著者紹介に書かれているものは素っ気なく、血が通っていない。そこで、朝日新聞の〈語る・人生の贈りもの〉2014年2月に掲載された保阪さんの言葉で紹介する。

（一部要約）

「中学生の時、近代日本文学やフランス文学を読みふけりました。高校生になると演劇の脚本を読み始め、北海道大学のシナリオ研究会でシナリオの書き方も勉強しました。最初に書き下ろした脚本は、大学3年の時の「生ける屍(しかばね)」という特攻隊員の戦後を描いた作品。上演もしました。今も大切に持っています。

演劇青年がなぜか新聞記者を目指しました。演劇担当の記者になりたかったんです。新聞社の演劇記者を父親に持つ友人がいて、「うちの親父(おやじ)は演劇ばかり見てる」と話していたのがうらやましくて。しかし、新聞社の最終面接で、ある質問に「革命家の側に立ちます」と答え、採用留保になってしまいました。それで電通PRセンターに入社。数年後、出版社の朝日ソノラマに転職します。入社して編集者になりました。社員が豪快な連中ばかりで、新聞記者OBの思い出話もむちゃくちゃ面白かった。

1967年、月刊誌の1月号に前年を総括する原稿を書きました。その記事を読んだ朝日新聞論説主幹の森恭三さんに、「若いのによく書けている」と激励されました。「文筆業でやっていけるのでは」と自信になりました。

1967年末に朝日ソノラマを退社。フリージャーナリストとして歩み始めました。でも退社1年半で暮らしに困った。フリーで生きるには、秀でた専門分野が一つはなくてはダメ。そこで昭和史を誰よりも深く理解することを選びました。

その端緒となったのが三島由紀夫の自決事件でした。彼の檄文(げきぶん)にあった「共に死なう」という表現が心にひっかかった。なぜひっかかるのか考え、その数年前に雑誌で読んだ「死なう団事件」の記事に思い至りました。改めて調べると新たな史実が分かってきた。年表では1行で済まされる出来事にも、様々な人生やドラマがある。それを掘り起こし、一冊の本にしたいと考えようになりました。」

なお、保阪氏の著書をウィキペディアで調べると単著 128 冊、共著その他 29 冊、合計 157 冊そのジャンルは様々。「昭和史」がタイトルの出てくるのは 2007 年からである。

## 2-1. 特徴1. 「昭和史」に特化

これについては、多く語る必要がないだろう。2004年に個人誌『昭和史講座』の刊行で第52回菊池寛賞を受賞。2017年には『ナショナリズムの昭和』で第30回和辻哲郎文化賞受賞したことで明らかである。

昭和史の専門家として活躍中、ある日、「私は作家の半藤一利氏と共に天皇、皇后両陛下にお会いして、私的な形でのご懇談という機会をいただいたことがある。堅苦しい服装ではなくカジュアルで、という形であり、両陛下しかいない応接室でお会いしたのです。ご進講というより、私的懇談、あるいはもっとくだけて「会話を交わす」といった趣であるように思う。」「私的懇談」の形では、天皇、皇后両陛下と「対話」を交わした経験もおありだ。

(サンデー毎日 2016年10月2日号「天皇、皇后両陛下と私が交わした「対話」

## 2-2. 特徴2. 天皇への深い思い

昭和史から戦争、そして天皇と繋がっていくのは、保阪氏にとって必然なのであろう。保阪氏は「天皇が時代をつくり、時代が天皇をつくる」という言葉を発している。

(朝日新聞 2016年8月10日朝刊)

天皇に関係する著書としては、『天皇家とその時代』(朝日ソノラマ-1993)。『さまざまなる戦後』(文藝春秋-1995.2)、のち「天皇が十九人いた さまざまなる戦後」(角川文庫-2001)を皮切りに『昭和史の大河を往く』(毎日新聞社)の第3集『昭和天皇、敗戦からの戦い』(2007年。中公文庫 2013年)がある。この第3集の評に「皇居の濠を隔てて対峙する、昭和天皇とマッカーサーとの息詰まる心理戦。「天皇制下の民主主義体制」へ、この国のかたちを決めた決断の時を、昭和天皇と3人の弟宮の担った歴史的使命を、新視点で問い直す。」がある。

また、この第3集には、三笠宮殿下が『支那事変に対する日本人としての内省』を昭和19年の戦時に書かれ、日本軍の誤りを指摘されたことが触れられている。

## 2-3. 特徴3. 徹底した取材

司馬遼太郎があるテーマで書こうとしたとき、神田界隈の古書店からその関係本がなくなった、との逸話が残っている。ドキュメンタリー作家としては、徹底した取材は当然のスタンスなのであろうが、保阪正康氏の徹底ぶりはつぎの著書で確認できる。

### ① 『東条英機と天皇の時代』

(伝統と現代社 1979-80、のち文春文庫、ちくま文庫)

保阪氏は「東条の評伝を依頼されたのは42歳の時です。評伝の取材には7~8年かかりました。まず、旧陸軍将校の親睦団体「偕行社」の名簿をもとに、東条に関係のある200人くらいに「会いたい」と手紙を出したら、150人以上が取材に応じてくれました。

また、国会図書館に3年ほど通い詰め、昭和20年までの近代史の史料をほとんど読みました。東条夫人のかつ子さんには20回ほど会い、色々な話が聞けました。」と書いている。

## ② 『天皇のイングリッシュ』

(2015 廣濟堂新書)

この本は、今上天皇が学習院中等科時代に受けた英語教育についてまとめた本である。今上天皇は終戦直後、米国のヴァイニング夫人から英語教育を受けたが、それは米国流の民主主義を学ぶことをも意味していた。昭和天皇から明仁天皇へと受けつがれた「平和主義」の意味を説かれたとされている。

その取材は、ヴァイニング夫人の『皇太子の窓』を丹念に読み、夫人が使った英語の副読本を読破している。そこから夫人からの影響を分析し、天皇が「人間として」の根幹の部分形成していった最初の要素は、ヴァイニング夫人の教育であるとしている。

## ③ 近著では、『昭和天皇実録 その表と裏 1～3』

(「サンデー毎日」2014～2015 連載)

これは保坂さんが、各章のテーマについて、昭和天皇実録を読み解く形になっている。この書物の評に「『昭和天皇実録』を徹底的に読み抜き、著者の深い識見と膨大な資料によって拡充。昭和天皇の戦争体験の未知なる真実を明らかにする。昭和という時代からのメッセージを日本人全体に託す、ライフワーク第1巻。」がある。

### ■超人的な取材をした図書を書評で賞賛した事例

#### 書評1. 『昭和解体 国鉄分割・民営化30年目の真実』

(牧久著、講談社・2700 円)

「国鉄解体をさまざまな立場の人たちから取材してまとめた書。なぜタイトルが昭和なのかは、具体的な指摘があり読み進むうちに納得できる。著者の執筆にかけるエネルギーに、「使命感をもって書かれた歴史書」との印象をもった。

#### 書評2. 『兵士というもの ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理』

(ゼンケ・ナイツェル、ハラルト・ヴェルツァー〈著〉 小野寺拓也訳 みすず書房)

「2人の著者は戦後生まれだが、イギリスの文書館に眠っていた膨大な関係資料に目を留め、その分析に時間を費やした。本書はすでに18カ国で訳されている。日本は19カ国目である。訳者あとがきはこの書の意義を正確に論じている。盗聴記録は、日記や手紙など、一人称で書かれた「エゴ・ドキュメント」の限界を超える可能性を秘めている。多様な階層の兵士の声が聴け、戦時暴力などにも頻繁に言及されているからだ。」 評・保阪正康(ノンフィクション作家)

#### 書評3. 『天皇陛下の私生活—1945年の昭和天皇—』

(米窪明美著、新潮社 2015.12)

「これは、ユニークなノンフィクションだ。膨大な史料を繙き、皇居の最奥で行われる宮中祭祀からネクタイの結び方や就寝時の服装、愛用のゴミ箱、さらには身支度、お風呂、トイレの決まりごとまでを丹念に集めて、昭和天皇の「生涯で最も特別な 1 年」の暮らしぶりを鮮やかに甦らせた。そこに息づいているのは、息子であり、兄であり、夫であり、父である人間・天皇である。」

#### 2-4. 特徴4. 歴史を重視

##### ① . 保阪氏の言葉から

「歴史は国家ではなく国民がつくる。我々には知る権利という市民的権利があることを、義務教育で教えるべきです。我々の側から発想を変えないと、社会は変わりません。」

(歴史は私たちがつくる 保阪正康さんに聞く 朝日新聞 2017 年 10 月 11 日 朝刊)

##### ②. 書評から

『戦争の大問題 それでも戦争を選ぶのか』

(丹羽宇一郎〈著〉 東洋経済新報社 1620 円)

「現代」を生きる私たちに戦争の本質をあえて直截に語っている。日本人は未(いま)だ戦争や歴史の意味を知らないのではないか、依然として主観的願望を客観的事実にすりかえているのではないか、その体質を変えなければ「我々はひとつ間違うと、たちまち戦前の日本人に戻る可能性がある」との懸念が示される。そのためには人に学び本に学び体験に学べと忠告する。歴史を知らずに大人になり有権者となる不幸という指摘は、まさに著者の心底からの叫びと解するべきだろう。 評・保阪正康(ノンフィクション作家)

#### 2-5. 特徴5. 評論家

保阪氏の肩書きは「ノンフィクション作家」の他に「評論家」が使われることがある。作家を越えて、一つの定見を持った保阪氏をジャーナリストはそれを評価し、依頼されるのだろう。

##### ① 首相に回想録義務づけを

(朝日新聞 2018 年 04 月 25 日 東京 朝刊 オピニオン1)

(耕論) 歴史奪う、公文書改ざん 磯田道史さん、保阪正康さん、星野智幸さん

財務省が公文書を大量に改ざんしていたことは、社会に大きな衝撃を与えた。そもそも公文書を改ざんすると何が起こるのか。後世の人々が文書を読み解いて紡ぎ出す歴史はどうなるのか。

<保阪正康さん>

私たちは確かに、為政者に政治を任せます。ただ、歴史を確定させる権限までは渡していないはず。戦前も今も日本の為政者に欠けているのは歴史への責任意識、歴史への良心だと私は思います。たとえば、首相が退任したら5年以内に回想録を公表するよう義務づけることから始め



てみてはどうでしょう。

\* 紙面では、保阪正康さん(ノンフィクション作家)と表記されている。

② 天皇陛下の15日、全国戦没者追悼式でのお言葉への感想を保阪氏は求められている。



「戦後70年の15年に加わった「深い反省」という言葉には、戦争を経験した人が減り、戦争の記憶が社会から薄れていくことへの危機感があつたように思う。戦争への反省が必要だとはっきり述べ、これ以降毎年伝えてきた。

今回の追悼式は陛下にとって最後となるため、内容に大きな変化があるのではないかと予想していた。しかし、陛下が加えたのは「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ」という文言だけ。明治、大正、昭和前期と日本は戦争を繰り返してきたが、平成を含む戦後は戦争のない時代であったことを強調する思いが込められているように感じ、最後にふさわしい表現と思った。」

(毎日新聞)

③ . 8月15日のNHK「ニュース9」



このようなテーマの時、NHKは保阪氏を選んでいる。

### 3. もうひとつの評価

保阪氏のウィキペディアの「人物」に次のような記載がある。但し、「編集」のマーク付きで、信頼性が担保されたものではない。あくまでもご参考に。

①。「しかし、当事者の証言に偏重する研究姿勢には実証的立場からの批判も多い。小林よしのりも、「戦争の原因を自国の中でのみ探り、外国の視点がまったく抜け落ちているため、狭い蛸壺に入ってしまったような歴史観になっている」として、保阪の歴史観を「蛸壺史観」と評している。」

②. 「また、第二次世界大戦当時の軍部については極めて批判的であり、このことにあわせ、「大東亜戦争は自衛の戦争」と主張する靖国神社にも否定的である。そのため総理大臣の靖国神社参拝にも極めて批判的であり、一般人の靖国神社参拝についても「個人の自由」としながらも、「靖国神社に参拝することは靖国神社の主張を受け入れるということだ」と批判的である。」

\* \* \*

保阪氏は「もともと厚い本を読むのが好きだった」とのこと。担当する書評本は、いつも難解で分厚い図書が目につく。講演会では、いつもトーンが低めで、穏やかな語り口、それでいて多弁である。そこに私は、保阪氏の誠実さと熱いものを感じている。■